

装飾古墳に囲まれた『シラヌイ現象』

と鏡との考察（Ⅰ）

「蜃気楼現象とは！」 「八代海沿岸の特殊装飾古墳文様！」

熊本県八代海（不知火海）には、決まって八朔（旧暦8月1日）の未明になると神秘的火“不知火（シラヌイ）”が現れる。

漆黒の夜海に単体あるいは複数の光体として発現、明滅、移動等を繰り返す不知火は古代から現代まで多くの人々を魅了した。

龍燈・天火・鬼火などと呼ばれた不知火の記録は非常に古く日本書記によると、八代海に船出した景行天皇（西暦71～130年？）が“闇夜で進路を見失い遠方に見えた不思議な怪火を目指したところ沿岸に辿りついた”と記録する。

その故事にちなみ宇城市不知火町松合では例年『不知火・海の火祭り』を開催、熊本地震（2015年）発生以前までは未明に多くの不知火が出現、観察されていた。

その正体については、これまでの研究では漁火説[神田(1992)]、空気レンズ説、自然燃焼ガス説、生物発光説、塩分摩擦発光説、噴火説など様々であったが、現在では漁火や街灯などを光源とした光学現象である蜃気楼説[宮西(1943)、山下(1994)、立石(1994)]が主流である。

しかしながら、太陰暦の八朔の未明に限定された「不知火」の稀有な行動を果たして蜃気楼現象として片付けられるものなのであろうか。

また、全国一の装飾古墳を擁する熊本県下において、八代海を取り囲むように考古学的にも注目に値する特殊な文様を施す古墳が多く点在する。

伝承や古文書の記録から少なくとも数千年は

International Organizations

03-21780 CBA International (CBAI)
 Yokohama 231 Japan
 Executive Dir Yusuke J Matsumura
 Advisor Dr Y Tange
 ■Tech investigation for radar/visual UFO
 Reports by civ & military aviation pilots.
 Non-profit worldwide scientific research
 Org.
☐ Aerospace UFO News (Quarterly)
 Divisions :
☐ Aerospace UFO Research Center
☐ HQ International UFO Observer Corps

CBAインターナショナル(CBAI)

民間・軍の航空パイロットによるレーダー及び目視におけるUFO報告書の専門的調査。
 非営利の世界的科学研究団体。
 Aerospace UFO News(季刊)
 部門 :
 Aerospace UFO Research Center(AURC)
 国際UFO観測隊本部(IUOC)

※INTERAVIA ABC AEROSPACE DIRECTORY 1986(インタラビアABC航空宇宙年鑑1986より)

遡るであろう不知火の歴史を顧みて、U F O
L O G Y (宇宙科学大系)的視点から蜃気楼現
象説に科学的メスを入れる。

◎不知火は実際に

どのように見えるのか?◎

1963年9月17日夜～18日早朝にかけて、C B
A I が総力を結集して八代海を取り囲むよう
に10地点に分かれ、光学機器を活用した大規
模な不知火観測・古墳調査を実施した。

本誌は各観測地点より撮影したU F Oに連動
する不知火写真及び特徴的発現状況を記録し
た貴重なデータを入手した。

また“不知火特集”を企画した民放T V局A
は、1981年末明、永尾劔神社観望所に設置の
T Vカメラとボートに搭載した超高感度(S I
T)カメラの2台で不知火の撮影に成功してい
る。

当日の天候は台風の影響で雨が降り発現は絶
望視されていたが、0時頃には奇跡的に雨も上
がり不知火が発現する12～13km先の海域を目
指してS I Tカメラ搭載のボートは松合漁港
を出港したのである。

それでは、これまで誰もが想像だにしなかつ
た不知火の実態に迫る「C B A I のデータ」
と「T V局AのV T R映像」の特徴的内容を
紹介する。

※地図内には観測地点と不知火の発現範囲、八代海
周辺の装飾古墳及び特異的な装飾文様を記載した。

◎C B A I が記録した特徴的な不知火の

行動(1963年9月17日夜～18日早朝)◎

- ① 観測地点A、B、C、F、H (激しい明滅を繰り返す)
- ② 観測地点A (王冠状を形成する)
- ③ 観測地点F (環状を形成する。他の不知火が二段になり上段が水平線上で明滅する)
- ④ 観測地点I (巨大な円形を形成する。手前側の不知火が弯曲を形成する)
- ⑤ 観測地点J (4つの不知火が明滅を繰り返す。その中の右側の1つが舞い上がって消滅する)
- ⑥ 不知火の上空にU F Oが出現する。
- ⑦ 不知火に炭素棒状に見えた芯を確認する。
(観測地点C：二段に広がった不知火はガス状のものを残し芯の残像が見える)
(観測地点I：卵形の不知火中央部に薄黒い炭素棒状の垂直線を視認する)
- ⑧ 観測地点I (列状に並んでいた1つの不知火が列から離れて同観測地点に接近する)
- ⑨ 観測地点B、I (2つの不知火が海面から空中に舞い上がり、滞空した後再び海面に降下する状況をフィルムカメラで同時にキャッチする)
- ⑩ プリズム分光器を用いて人工的灯火を視認すると連続スペクトルとして見えるが、不知火は赤と緑の不連続スペクトルとして視認された。

◎S I Tカメラ(倍率20倍)が捉えた特徴的 不知火の行動(1981年8月29日未明)◎

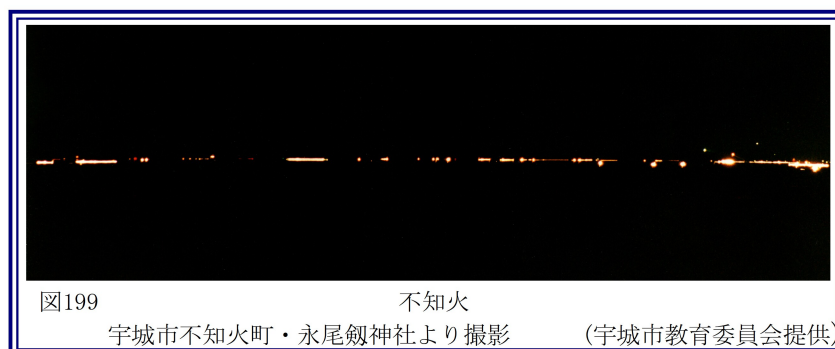
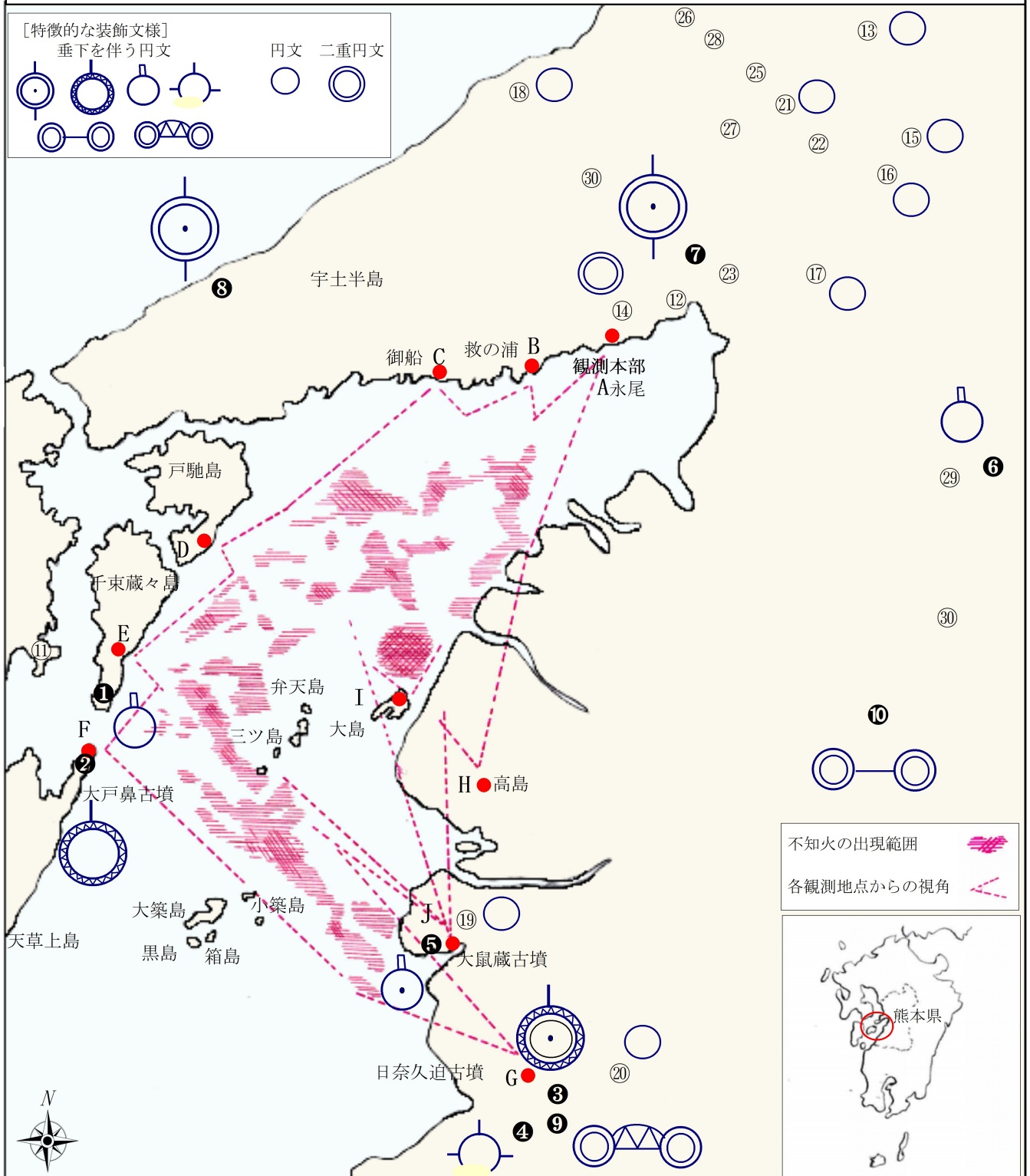
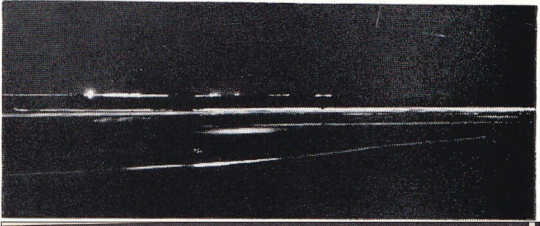
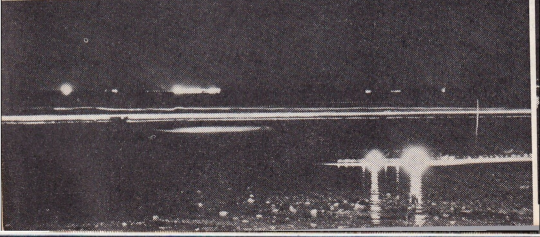
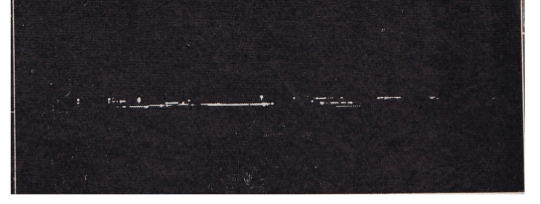
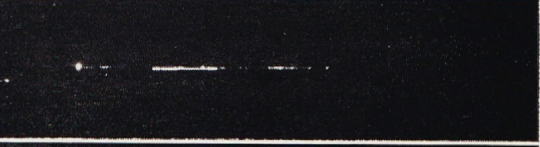
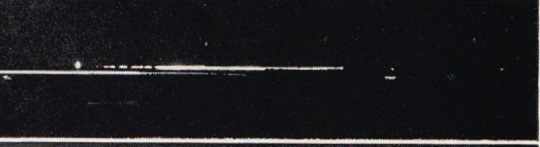
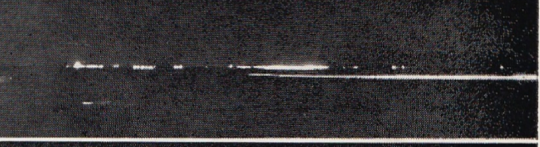
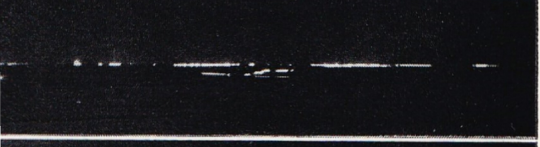
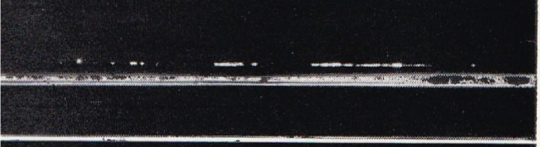
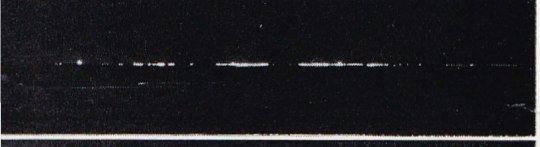


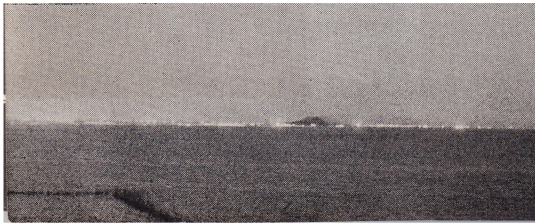
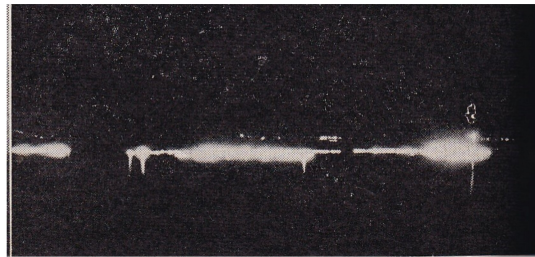
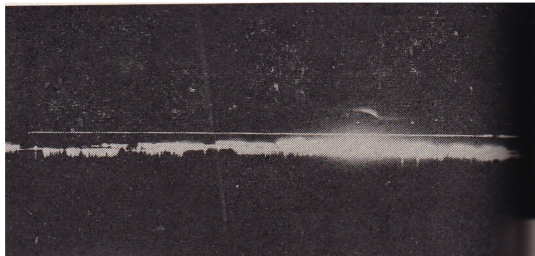
図200 CBA I 不知火観測地点全10ヶ所と不知火発現範囲 1963年9月18日(午前1時3分～5時41分)
八代海周辺装飾古墳分布と装飾文様

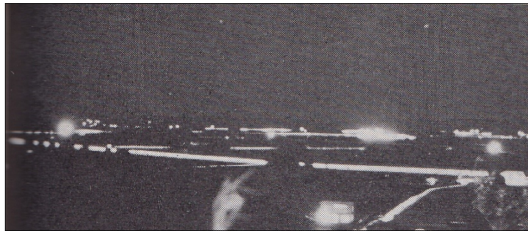
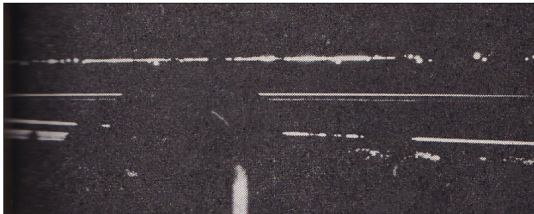
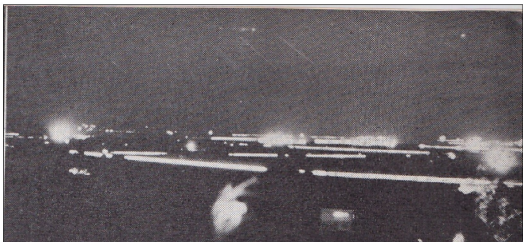


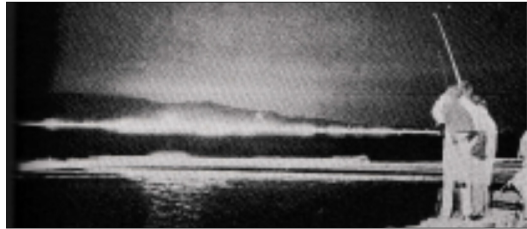
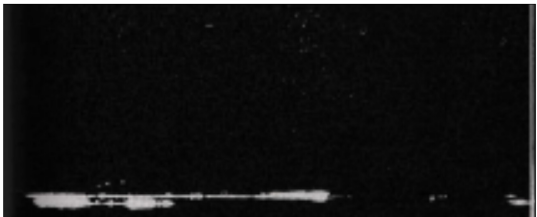
番号	装飾古墳名	〔特徴的な装飾文様〕	⑪	長砂連古墳	〔直孤文〕	⑫	宇土城跡山遺跡出土装飾石材	〔線刻〕
①	広浦古浦	〔円文/紐状線〕	⑬	国越古墳	〔直孤文〕	⑭	不知火塚原1号古墳	〔線刻〕
②	大戸鼻南古墳	〔同心円文/紐状線〕	⑮	三拾町板碑転用石障材	〔直孤文/円文〕	⑯	鬼の岩屋古墳	〔線刻〕
③	長迫古墳	〔三重同心円文/紐状線〕	⑰	桂原古墳1号墳	〔線刻/二重円文〕	⑱	飯又古墳	〔線刻〕
④	竹ノ内古墳	〔円文/紐状線〕	⑲	晩免古墳	〔円文〕	⑳	梅崎古墳	〔線刻〕
⑤	大鼠蔵古墳群	〔二重円文/紐状線〕	㉑	潤野古墳	〔円文〕	㉒	東畑古墳	〔線刻〕
⑥	竜北高塚古墳	〔円文/紐状線〕		宇賀岳古墳	〔円文〕	㉓	城塚古墳	〔線刻〕
⑦	鴨籠古墳	〔同心円文/带状沈線〕		ヤンボシ塚古墳	〔円文〕	㉔	大野村石棺	
⑧	小田良古墳	〔円文/横沈線〕		小鼠蔵古墳群	〔円文〕	㉕	大王山3号墳	
⑨	田川内2号古墳	〔二重円文/連結直線弧線〕		五反田古墳	〔円文〕	CBA I (1963) THE FLYING SAUCER NEWS Vol. 6 No. 9 に基づき作成		
⑩	門前2号古墳	〔二重円文/連結直線〕		椿原古墳	〔円文〕			

図201 C B A I 1963年9月18日 観測地点からの不知火撮影写真及び観測状況

観測本部・A (熊本県宇土郡永尾)			
00:00 ～00:10		02:29 ～02:34	
		01:58:30 ～02:18	
		赤外線フィルムを使用して撮影したもの	
		03:27:30	大島の西方4° と7° との間 多数の不知火が激しい明滅を繰り返す
		03:28	王冠状を示す3個の不知火が出現
		B (救の浦)	
		01:07	不知火2個発現大島周辺に次第に数を増す
		03:10～ 03:17	
		03:36:30	大島左に不知火5つ出現、左から4つ目の火消滅
		03:38	大島右10° 中に20個の不知火(オレンジ色)点滅繰り返す
01:00 ～01:15		03:40 ～4:00	
		04:00 ～04:25	
		04:30 ～04:35	
		04:39	大島左5° 中に不知火出現 左12° 付近の不知火1つ強く光る
01:15 ～01:38			
01:44 ～01:50			
01:50 ～01:58			
01:58 ～02:03			
02:03 ～02:13			
02:13 ～02:19			
02:19 ～02:22			
02:22 ～02:26			
02:26 ～02:29			

C (御船)		D (戸馳島)	
01:07	大島中央より右に不知火1個発現	01:08	不知火出現確認
01:17 ~00:10		時刻不明	
01:14	大島左へ4° の所に4個の不知火発現(点滅きわめて激しい)	時刻不明	
02:00	不知火は大島から南西の範囲に急激に2段となって拡がる その火はガス状のものを残し、芯の残像がみえた	04:46	大島北側10° ~15° の不知火の輝きが強まる
		04:48	4個に分かれていた不知火が活発に明滅
		E (天草蔵々島)	
03:40 ~03:50		01:07	不知火出現確認
		00:02 ~00:11	
04:02 ~04:09		01:01 ~01:13	
04:05	大島全面海域 不知火消滅	01:34	大島の15° ~10° の範囲 北から2.3.4個の小ブロックをなして並んでいる不知火を目撃北寄りの2つめの火がやや高く浮き上がった
04:52 ~04:58			
	※CとIとの無線連絡が不知火発現と同時に通信遮断となる	01:34 ~01:47	
		02:01 ~02:17	
		02:29 ~02:38	

02:39 ～02:50			G (日奈久永迫古墳)	
02:50 ～03:02			01:08	不知火出現確認
			01:00 ～01:15	
03:28 ～03:47			03:01	不知火北端に1個出現 北西方向に移動して消滅
			04:05	北西方向の右端に離れていた不知火消滅 左の一群の不知火活発な活動示す
F (大戸鼻古墳)			H (高島)	
01:12	不知火出現確認		01:03	不知火出現確認
01:41	不知火二段になる		01:22	一列に並んだ12個の不知火が3等分になり、中央の4つの火が近寄り点滅を繰り返し13個になる
01:49	大島より北方20° 付近を中心に半円状になる。上段が水平線上に点滅(環状不知火)		01:42 ～02:09	
02:55	不知火の点滅が激しく、緑・青・赤・白色等にきらめく 3個の不知火が2個に減る			不知火活動盛んになり明滅激しくなる
02:59	火4個になって点滅		01:57	不知火人型状に現れる
03:14 ～03:59			02:58 ～02:59	出現していた不知火の中央1個消滅
			03:41	不知火は西方の2個を残し消滅
			04:17	不知火全部消滅
			04:37 ～04:40	

I (大島)		J (大鼠蔵古墳)	
01:03	不知火出現確認	01:20	真北より6° 西より大島の右手方向 光点4個点滅 右端の1個がジャンプして消滅
01:14	不知火1個が列を離れ接近してくる(火の中央に薄黒い炭素棒のような線が垂直に立っている状態で接近)		
01:16	不知火の活動活発		
02:06 ～02:25		01:48	不知火アーチ状となる
		01:50	そのまま右側へ移動
02:14	大島の全面干潟上に等身大の光る物体(卵型)接近 中央から垂直に灰色の炭素棒のような芯が下に出ており、やがて消滅	03:37	大島の南6° の範囲に出現していた不知火が二段になり光度強くなる
		時刻不明	
02:55 ～03:15		時刻不明	
04:15 ～04:19		舞い上がる不知火	
	04:20 ～04:35	時刻不明	
04:47	4個の不知火が3個となり左右へ分かれる	03:55 ～04:02	救の浦(B)より臨む大島北面海域の不知火
	※CとIとの無線連絡が不知火発現と同時に通信杜絶となる ※海面より2mの観測地点 3時頃 不知火が巨大な円形をなし、手前側の火の列が弯曲		
			
			大島(I)から松橋右手方向二つ舞い上がり、再び海に帰る

CBA' I (1963) THE FLYING SAUCER NEWS Vol.6 No.9 に基づき作成

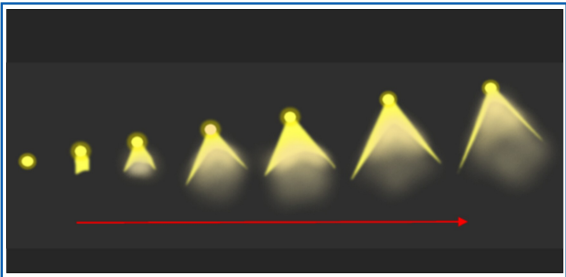


図202 スポットライト状に光を放つ不知火
1981年8月29日暗視カメラが捉えたサーチライトの
ように光を放つ不知火変化の様子 (イラスト)

- ① 永尾神社境内のTVカメラと松合漁港から出港したボートのSITカメラが同一と推定される不知火を撮影する。
- ② 1個或いは数個の不知火がランダムに発現、消滅を繰り返す。
- ③ 2個の不知火が左右に発現、互いに距離を縮めてスレ違い遠去かる。
- ④ 不知火が漁船の速度を遥かに上回る高速で左方向へ移動。
(距離12~13kmを考慮すると、不知火の速度は数百km或いはそれ以上か?)。
- ⑤ 数個の不知火が互いの間隔を維持しながら高速で左右に移動、その後間隔を保ったまま緩い蛇行を描き上昇して消える。
- ⑥ 1個の不知火と3個で集団を形成する不知火が互いに等間隔を保ち左右上下に激しく移動。
- ⑦ 海上の高い位置に大きな不知火が発現し、その左側にも小さな光点状としての不知火が発現。

⑧ 光点状の不知火が強烈なスポットライト状の光を海面へ照射し、瞬時に舞い上がって消滅。

⑨ 大きな不知火の右側に海面を照らす強烈なスポットライト状の光(不知火)が現れ、それが下方から消え始めて光点となる。

⑩ ⑨とは逆の行動をとる不知火が現れ、⑨と⑩の状況は幾度か繰り返さる。

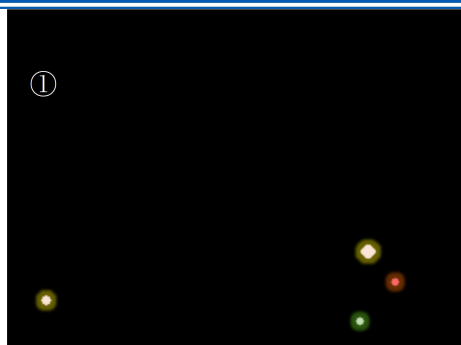
⑪ 大きな球状の不知火が回転しながらメラメラと燃え上がった状態として見える。その中に縦長の黒い芯状のものが確認できる。

⑫ スタッフの解説

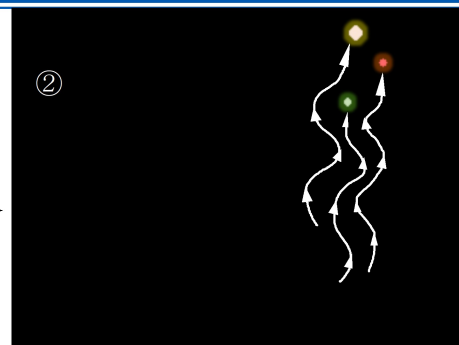
「不知火の出現地と推察される海域を目指して進むが、その海域を通り過ぎても不知火は遠く前方に見える。振り返ると後方にも不知火が見え、囲まれたようだ。虚像は通り過ぎると消えるが、不知火は消えない。」

CBAIのデータやTV局Aの映像には、まるで知的にコントロールされているかのような、単体或いは集団を形成する不知火のインテリジェンス溢れる不可思議な行動が捉えられている。

記録や映像からは蜃気楼説では納得しがたい不知火の特殊性が窺え、特にCBAIのデータ⑦の黒い芯状の目撃記録と、TV局Aが撮影した縦長の黒い芯状の映像⑪には極めて高



① 4個の不知火が発現



② ①で出現した不知火が等間隔に蛇行して上昇

図203 等間隔で上昇する不知火

(イラスト)

い類似性が認められる。

蜃気楼は気象状況に左右された虚像であることは周知の事実である。

その蜃気楼の目撃には様々な条件が必要となり、その条件によって蜃気楼の種類も異なってくる。

八代海では時折“下位蜃気楼”が出現、それが目撃、撮影されているのは承知している。

だが、不知火が側面への広がりを見せていることから、一部の研究者は不知火を世界的にも稀な現象とされる“側方蜃気楼(鏡映蜃気楼)”に分類しているようだ。

果たして、稀有な行動の不知火を側方蜃気楼説で片付けられるものであろうか？

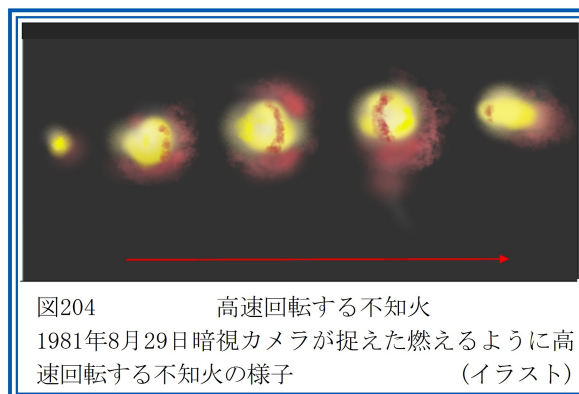
では、蜃気楼の種類と発生メカニズムについて簡潔に説明する。

◎ 蜃気楼とは ◎

遠くから届く光が暖気層(密度が小さい空気)と冷氣層(密度が大きい空気)との温度の境界層で直線的に進まず、途中で連続的に光の屈折が起こるために実際の景色が伸びたり縮んだり反転したりして見える光学現象が蜃気楼である。

光が密度の異なる層を通過する際に、その中を進む光の速さが変わることによって起因して蜃気楼が発生する。

暖気層と冷氣層の温度構造により一般的には



蜃気楼を上位と下位の2種に分類するが、不知火を側方蜃気楼現象であると提唱する研究者もあり、それを加えると3種の分類となる。

その3種の蜃気楼現象の主な特徴と発生条件等を以下にまとめた。

★ 上位蜃気楼 ★

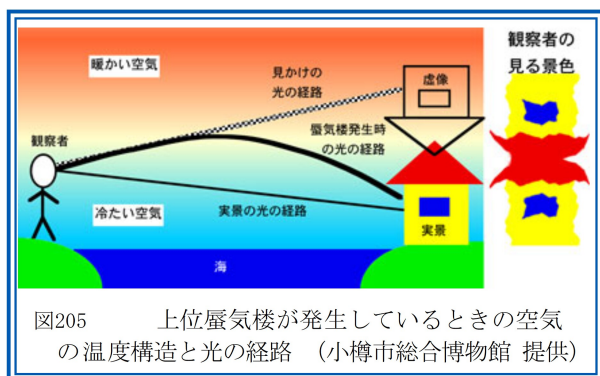
春の蜃気楼(4月～5月に多い)とも形容され、下側の空気層の温度が低く、上側の空気層の温度が温かい状態で、実際の景色の上側に伸びたり反転した虚像が出現する。

以前は、春の雪解け水が空気を冷やすと考えられていたが、近年は気温や風の動きが最も密接に関与していると考えられている。

上位蜃気楼は、冷氣と暖気の下上層温度差1～4℃程度で発生するとされ、海面上には少なくとも数m以上(境界層海上約2m～15m)の冷氣層が必要であるという。

富山湾東部沿岸で発生する蜃気楼現象について、様々な角度から科学的に研究し、その理

表8 蜃 気 楼 の 種 類		
上位蜃気楼(superior mirage)	下位蜃気楼(inferior mirage)	側方蜃気楼(lateral mirage)
・上暖下冷の温度構造の空気層で起こる ・遠方の景色が実際より上方に伸びたり反転して見える ・発生条件が厳しいため全国的には、富山湾や、琵琶湖、石狩湾、大阪湾、オホーツク海など限られた地域で見られる ・主に春頃の出現が多い ・見え方は数分で変化し、長時間みえることはあまりない	・上冷下暖の温度構造の空気層によって起こる ・遠方の景色が下方に反転して見える ・全国で頻繁に見られる現象 ・主に冬頃の出現が多い ・浮島現象、逃げ水現象	・暖気層と冷氣層が縦方向に分かれている ・物体の側方に蜃気楼が出現する ・非常に珍しく例がない現象 ・水平方向に光が異常屈折するもので垂直な崖や壁などが日差しを受けて熱せられた場合にそのような条件をつくりだす



論・実験を裏付けとした光の分野における蜃気楼の教材化を目的とした『富山湾における蜃気楼の研究とその教材化』（木下2000）では、河川水の影響や表面海水温度の調査に加え、水温はどの程度空気を冷やすことができるのか水温2℃と室温27.5℃の温度差25℃での条件で室内実験を実施している。

「この実験では冷氣層は1.5m程度しか存在できないことがわかった。しかも、実際には海水温度と空気との温度差が10℃程度であることを考慮すると、海水温で冷やされる空気層はさらに低く、薄くなるものと考えられる。」と解説している。つまり、海水温によつての冷氣層の形成には相当な温度差が必要となるのである。

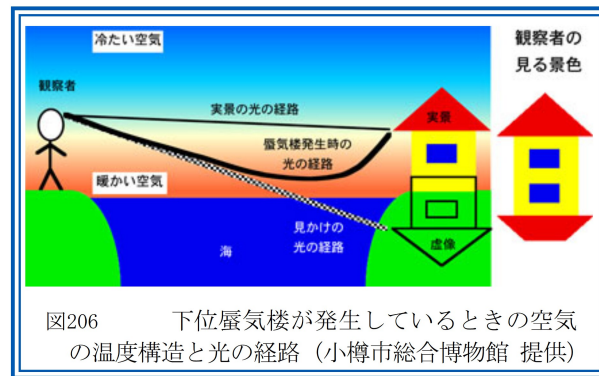
また富山湾を例にとるなら“陸地の温度上昇がきわだっていないと蜃気楼は出ない”ともいう。

別表を参考にすると、八代海の八朔時期の海水温と気温差を考えると、上位蜃気楼が発生するほどの冷氣層の形成は難しく、上位蜃気楼の可能性はほぼ消える。

何らかの光源があったとしても、その上方に見えた光を上位蜃気楼現象説で片付けることはできないのである。

★ 下位蜃気楼 ★

では、下位蜃気楼の発生についてははどうだろうか。



冬の蜃気楼(11月から3月に多い)とも形容され、下側の空気層の温度が温かく、上側の空気層の温度が冷たくなることで、上位蜃気楼とは正反対の状態となり、実際の風景の下側に反転した虚像が出現する。

暖かい空気の層は冷たい空気が温かい海水に接するところで暖められ、温度勾配が春とは逆になり、光の屈折の仕方も逆になるのが原因であるという。

一般的には冷氣と暖気の上下層1℃以下の温度差、境界層の厚み数cmでも蜃気楼は形成され、温かい空気の層は、目線より下、海面から高さ1m以内と考えられている下位蜃気楼は全国的にも珍しい現象ではない。

そもそも景色の下部への反転現象が下位蜃気楼であるが、本誌が過去4度（1986・1987・1997・1998）実施した不知火観測・撮影会においても、一度もそのような現象を視認していないのである。

永尾劔神社方面からの視認では、大島方面から右手方向にかけて広がるクッキリとした不知火の明滅と高速での移動が視認でき、光源とされる漁火や街灯がなくとも不知火は発現する。

★ 側方蜃気楼 ★

残るは、親火と呼ばれる光源の側面に火の数が増加する、或いは親火と呼ばれる光源が横に分裂するとした側方蜃気楼現象である。

側方蜃気楼は世界的にも非常に珍しく、長年蜃気楼の研究に携わっていた研究者でも観測例がほとんどないといわれている。

上位蜃気楼や下位蜃気楼の大気の密度差が垂直方向であるのに対して、側方蜃気楼の大気の密度差は水平方向に形成される状態が想定されている。

よって像の変化も横(側面)方向となり水平方向に虚像が出現するという。

唯一、八代海の不知火が側方蜃気楼現象に相当すると考えられてはいるが？

八代海は海底の凹凸の差が大きいことから水深差による海水の温度差、八代海独特の干潟の発生による温度差や放射冷却現象をその発生要因としており、それにより横方向に発生する大気の不均一性が指摘されている。

発生要因に基づくなら、八代海の各所において水温にかなりのばらつきが生じると推測され、そのような状況が報告されていなければならぬのだが。

そこで環境省のホームページ『八代海の概況、海域特性について(2)海域環境特性』を参考にすると、不知火海の水質データの測定に際して「湾奥北部A、湾奥南部B、湾中央C、湾中央南部D、湾南部Eの5つのグループに分類、調査したところ平均表層水温のグループ間の温度差は夏季平均1～2℃程度である」との調査結果を公表している。

(環境省ホームページ <https://www.env.go.jp/coun>

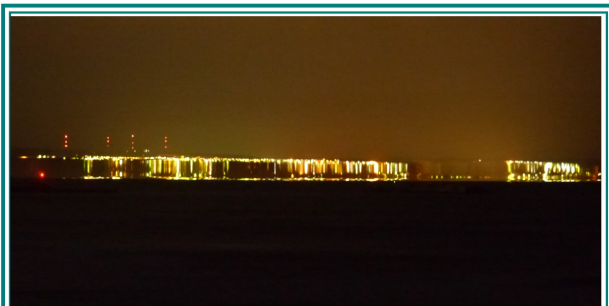


図207 上位蜃気楼
北海道斜里町から網走方向を撮影
(知床蜃気楼・幻氷研究会提供)

cil/20ari-yatsu//200-23/mat02_3-2.pdf)

この程度の温度差では、海水温の影響による水平方向の空気層の形成は極めて難しいと判断された。

また、C B A I の観測記録(1963年)に基づけば、不知火の発現範囲は八代海の北部沿岸部を除く広範なエリアに及び、発現は永尾劔神社から見てほぼ光源の無い西南西方向の戸馳島や維和島(千束蔵々島)方面にまで広がり、干潟の有無とも無関係であると考えられた。

不知火の研究者に側方蜃気楼を提唱者した「不知火の研究」を上梓の山下太利(1994)、と「不知火新考」を上梓の立石巖(1994)がいる。

山下は「不知火の研究」の本文中において、パネルヒーターを活用した側方蜃気楼現象の室内再現実験を行い側方蜃気楼「光源像が横に伸びる水平現象を確認した」と述べている。

だが再現実験に関するデータには、〔1. 観測者－対象間の距離 2. 対象の光源の高度 3. パネルヒーターの表面温度(表面海水温に相当) 4. 室温(海面上の温度に相当)〕などの記載がなく科学的再現実験とは言い難い。

一方、熊本県立高等学校B科学部のメンバーは、不知火の5年以上に及ぶ八代海上での観測及び蜃気楼に関する文献・資料を参考にした室内再現実験を実施して、その結果をウェブサイト公開している。

八代海上での観測では下位蜃気楼が確認され、

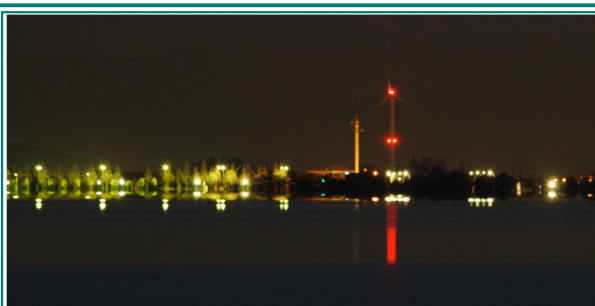


図208 夜の鳥丸半島周辺の下位蜃気楼
滋賀県
[琵琶湖蜃気楼研究会 伴禎(ばん ただし)提供]

室内再現実験では下位蜃気楼と側方蜃気楼が確認できたと解説している。

また最近、不知火が観察されていないのは20年前からの禁漁をその要因とし、発現に不可欠な光源となる漁火との相関関係を指摘している。

果たして不知火は、街の街燈や漁火などの光源に海水面の温度、気温と風が作用して出現する蜃気楼現象として片付けられるものなのだろうか。

本誌が調査した不知火に関する過去の発現データに基づくと、熊本地震発生の前年に当たる2015年までは発現していたと報告されており、漁火との相関は認め難い。

確かに実験結果では側方蜃気楼らしき虚像が捉えられてはいるが、だからと言って室内再現実験の条件を八代海上にそのまま適応させることは極めて困難である。

1963年のC B A Iの観測記録によれば、不知火の発現は八代海北部沿岸を除く広範な面積に及び、しかもランダムに集団を形成して分布し、時間の経過に伴い様々に変化する。

大島方面から右手方向への広がり幅は、数百mから1 km以上にも及んでいる。

仮に実験内容を八代海へ適応させて側方蜃気楼を出現させるとしたら、水平方向に空気の濃密(温度差)を作り出すべく膨大な量の以下

の機器が必要となってくる。

- ・海面温度を100℃に上昇させるシリコンラバーヒーターと温度調節器、或いは巨大な温風器(またはそれらの代用品)
- ・風向と風力調整を担う巨大な扇風機(またはその代用品)

上記以外の他の方策での検討の余地も残されてはいるが、どちらにしても相当数の不知火を発現させるのには極めて非現実的方策である。

もし不知火が側方蜃気楼であるなら、八代海の海面には温度差の異なる水平の空気層を作り出す無数の高熱源帯が必要となってくる。

残念ながら八代海には、伊豆諸島や小笠原諸島及び沖縄トラフで発見された熱源となるような熱水噴出孔(通称ブラックスモーカー)などの存在は確認されていないし、海底からの高温ガスの噴出報告もされていない。

八代海・湾奥部での夏季水温は30℃前後であるという。

この海水温度と再現実験の設定温度とでは相当の乖離が生じており、八代海上に側方蜃気楼を作り出すことは不可能であるとみるべきであろう。

昨年、2024年9月3日未明(八朔)、同高等学校科学部のメンバーは、八代漁協の協力を得て不知火の再現実験を試みており、「漁船に搭

「日本書紀」 養老四年(720年)舍人親王

卷第7 景行天皇 十八年

五月壬辰朔、從葦北發船到火國。於是日沒也、夜冥不知著岸。遙視火光、天皇詔挾抄者曰「直指火處。」因指火往之、即得著岸。天皇問其火光之處曰「何謂邑也。」國人對曰「是八代縣豐村。」亦尋其火「是誰人之火也。」然不得主、茲知非人火。故名其國曰火國也。

〈現代語訳〉

五月一日、葦北から船出して火国についた。ここで日が暮れた。暗くて岸につくことが難しかった。遥かに火の光が見えた。天皇は船頭に詔して、「まっすぐに火のもとへ向っていけ」といわれた。それで火に向かって行くと、岸につくことができた。天皇はその火の光るもとを尋ねて、「何という邑か」と聞かれた。国人は答えて、「これは八代県の豊村です」といった。またその火を問われて、「これはだれの火か」と。しかし主が判らない。人の燃やす火ではないということから、その国をなづけて火国とした。 宇治谷(1988)

「古事記」

次生筑紫嶋此嶋亦身一而有面四毎面有名故筑紫國謂白日別豐國謂豐日別肥國謂建日向日豐久土比泥別

次に筑紫の島（九州）を産みました。この島も、からだ一つに4つの顔があり、顔ごとに名前がありました。その内訳は筑紫の国（福岡県東部以外）は白日別といい、豊の国（福岡県東部・大分県）は豊日別といい、肥の国（熊本県・佐賀県・長崎県）は建日向日豊久土比泥別といい、熊襲の国（宮崎県・鹿児島県）は建日別といいます

竹田恒泰(2013)

載の一つの光源が横に広がり、二つの光が並んでいるように見えた」と報告している。

翌日の朝日新聞朝刊(全国版)は写真付きで高校生の実験結果を報じた。

これまでの再現実験では屋内外を問わず、光源の側方に一つの虚像(側方蜃気楼)が確認されたにすぎない。

では、過去の夥しい数での不知火の発現及び高速移動はどの様に再現するつもりなのだろうか。

最低でも高出力エンジンを搭載した相当数の漁船が必要となるが、八朔当日において、八代海沿岸部の多くの漁協では出港をみあわせてきたという。

となれば、シラヌイと漁船との相関は成立しない。

つまり、八代海において不知火の再現実験を何度行おうとも、過去の不知火の発現状況を再現することは不可能に近いといわざるをえないのである。

何故なら、蜃気楼は虚像としての自然現象(natural phenomenon)であるのに対して、CBA I、TV局AのSITカメラ及び本誌の取材、調査において撮影された不知火は、その特異な行動が示唆するように意志を帯びていると考えられる物体(object)以外の何物でもないと考えられるからなのである。

不知火の発現日は、常に月と太陽がぴつたりと重なる朔(新月)が選ばれている。

天体の動きと連動した月が輝きを失った状態

でシラヌイの輝きが一層強調されている。

数千年間も宇宙法則に適合したと言っても過言ではない行動を続けてきたのである。

偶然ではあり得ない宇宙に連動した行動の一語に尽きる。

ましてや不知火を地球上の科学などで解明できるものでもなく、異なる視点からのアプローチが要求されるのである。

不知火の研究者や再現実験者たちは常識では想定できない動きを繰返す不知火を実際に目撃したことがあるのだろうか。

もし、目撃しているのなら再現実験が無意味なものであることを痛感する筈なのだが！

本誌は長期間の労力を費やした高校生の皆さんの観測及び再現実験を否定するものではない。

しかしながら、側方蜃気楼については未解明の部分が多く、発現日と発現時刻が限定される夜間の海上において暖気層と冷氣層が交互に、しかも水平方向に長時間形成される自然現象は科学的にも考え難いのである。

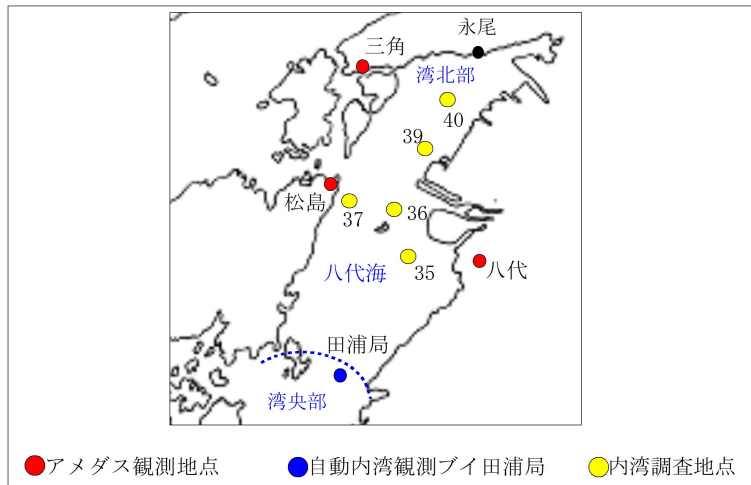
アメリカ気象学会気象用語集(Glossary of Meteorology)には、「lateral mirage(横方向の蜃気楼)」について、自然現象として目撃情報がまれに報告されるのは、間違いなく観測結果の誤った解釈から生じたものである」と記載されている。

不知火と側方蜃気楼とは別物であると考えべきなのである。

表9 不知火発現年度のアメダス観測所の最高気温と発現時間帯との温度差

年	八朔	不知火発 現時刻	不知火発現時の気温(A)		最高気温(B)		温度差 (B-A)	計測地点	海水温(C)		温度差 (C-A)	計測地点
			(°C)	時間	(°C)	時間			(°C)	時		
1981	8/29	1:00頃	23.9	1:00	27.9	11:00	4.0	松島	27.9	内湾調査8/27	4.0	定点40
1982	9/17	0:00※	20.4	0:00	26.2	12:00	5.8	松島	24.4	内湾調査9/14	4.0	定点37
1983	9/7	0:00※	20.8	0:00	27.7	12:00	6.9	松島	28.3	内湾調査9/6	7.5	定点40
1984	8/27	0:00※	26.5	0:00	32.4	14:00	5.9	三角	28.6	内湾調査8/29	2.1	定点35
1985	9/15	0:00※	21.8	0:00	29.7	13:00	7.9	松島	29.2	内湾調査9/13	7.4	定点35
1986	9/4	0:00※	23.8	0:00	33.4	13:00	9.6	松島	28.5	内湾調査9/5	4.7	定点40
1987	9/25	0:00※	19.2	0:00	25.2	14:00	6.0	松島	24.6	内湾調査9/27	5.4	定点35.36
1988	9/11	0:00※	23.5	0:00	27.8	16:00	4.3	松島	27.0	内湾調査9/9	3.5	定点39.40
1989	8/31	1:25	22.0	1:00	29.5	14:00	7.5	松島	26.6	内湾調査8/4	4.6	定点40
1992	8/28	0:35	23.8	0:00	34.1	14:00	10.3	松島	26.8	内湾調査8/26	3.0	定点39
1994	9/6	1:08	25.7	1:10	33.5	13:00	7.8	松島	—	内湾調査9/2	—	—
1995	8/26	0:54	27.1	0:50	34.6	14:00	7.5	三角	31.4	内湾調査8/7	4.3	定点35
1996	9/13	0:10	23.3	0:10	30.2	14:00	6.9	松島	27.7	内湾調査9/4	4.4	定点40
1997	9/2	0:08	24.6	0:10	32.2	14:00	7.6	松島	28.6	内湾調査9/3	4.0	定点40
1998	9/21	0:45	25.4	0:40	34.9	15:00	9.5	八代	26.7	内湾調査9/24	1.3	定点40
1999	9/10	0:25	24.8	0:20	31.8	14:00	7.0	八代	27.4	内湾調査9/6	2.6	定点37
2000	8/29	23:40	25.5	23:40	34.3	15:00	8.8	八代	28.1	内湾調査8/31	2.6	定点35.40
2001	9/17	0:00※	20.8	0:00	29.2	16:00	8.4	松島	27.1	内湾調査9/19	6.3	定点37
2002	9/7	3:30	24.3	3:30	31.4	15:00	7.1	八代	26.8	内湾調査9/10	2.5	定点37
2003	8/28	0:30	27.9	0:30	31.0	13:00	3.1	八代	29.4	内湾調査8/26	1.5	定点40
2004	9/14	0:00※	24.9	0:00	33.0	15:00	8.1	三角	28.7	内湾調査9/15	3.8	定点37
2005	9/4	1:30	23.6	1:30	33.2	14:00	9.6	松島	27.6	1:20	4.0	田浦局
2006	8/24	0:00過ぎ	22.8	0:00	29.0	14:00	6.2	八代	27.9	0:00	5.1	田浦局
2007	9/11	0:00過ぎ	21.8	0:00	30.8	16:00	9.0	松島	27.5	0:00	5.7	田浦局
2008	8/31	0:00過ぎ	23.2	0:00	29.1	17:00	5.9	八代	26.7	0:00	3.5	田浦局
2009	9/20	1:00過ぎ	18.8	1:00	29.0	14:00	10.2	八代	26.0	1:00	7.2	田浦局
2011	8/29	0:30頃	24.5	0:30	32.4	15:00	7.9	松島	27.4	0:20	2.9	田浦局
2012	9/16	0:30頃	22.5	0:00	30.4	13:00	7.9	八代	27.7	0:20	5.2	田浦局
2013	9/5	2:00頃	18.7	2:00	27.2	15:00	8.5	八代	24.9	2:00	6.2	田浦局
2014	8/25	1:00過ぎ	23.1	1:00	29.2	16:00	6.1	八代	—	—	—	—
2015	9/13	0:41	21.8	0:40	28.6	14:00	6.8	八代	25.7	0:40	3.9	田浦局
1981～2015 平均値			(A) 23.2		(B) 30.6		(B-A) 7.4		1981～2004 平均値	(C) 27.5	(C-A) 3.9	
									2005～2015 平均値	(C) 26.8	(C-A) 4.9	

- ・※不知火発現を0:00としてデータを取得
- ・松島、三角、八代の観測所から最も温度差がある地点を選択
- ・不知火発現時間は、熊本日日新聞・西日本新聞の記事より抜粋



- ・1981～2004年熊本県水産研究センター提供
- ・2005～2015年熊本県水産研究センター自動海況観測HPより引用
- ・内湾調査は、月一回行われる日中のデータ
- ・定点35.36.37.39.40から最も温度差がある地点を選択
- ・田浦局は24時間観測を行っているため不知火発現時のデータを取得

表10

八代海の水溫

八代海 内湾調査(水深0m)水温													田浦局(表層0.5m)水温	
年	8月						9月						不知火 発現時	昼 12:00
	定点35	定点36	定点37	定点39	定点40	8月平均値	定点35	定点36	定点37	定点39	定点40	9月平均値		
1981	27.2	27.3	26.8	27.1	27.9	27.2	25.0	24.5	24.9	24.5	24.3	24.6	—	—
1982	26.6	28.5	29.6	29.2	29.0	28.5	24.3	24.3	24.4	24.2	24.3	24.3	—	—
1983	26.5	27.6	27.1	26.6	27.2	27.0	27.6	27.9	27.7	27.8	28.3	27.8	—	—
1984	28.6	27.2	26.2	27.3	27.6	27.3	25.6	25.2	25.8	—	25.8	25.6	—	—
1985	26.9	27.0	27.8	27.4	27.6	27.3	29.2	28.5	28.9	28.6	28.6	28.7	—	—
1986	26.2	26.2	26.2	26.0	26.4	26.2	28.3	28.1	27.8	28.1	28.5	28.1	—	—
1987	26.1	26.3	26.4	26.4	26.4	26.3	24.6	24.6	24.4	23.9	23.7	24.2	—	—
1988	27.8	27.7	27.8	28.6	28.5	28.0	26.4	25.6	26.2	27.0	27.0	26.4	—	—
1989	—	26.6	—	—	25.9	26.2	—	26.7	—	—	27.1	26.9	—	—
1992	26.0	26.3	26.6	26.8	26.6	26.4	25.0	24.9	25.1	25.2	25.3	25.1	—	—
1994	28.2	28.5	28.8	28.4	29.7	28.7	—	—	—	—	—	—	—	—
1995	31.4	30.9	29.2	30.6	31.3	30.6	26.2	26.0	25.9	26.0	26.3	26.0	—	—
1996	28.5	28.7	27.4	27.2	28.5	28.0	27.3	27.1	26.9	27.5	27.7	27.3	—	—
1997	26.4	26.6	26.7	26.7	26.9	26.6	27.5	27.6	27.7	27.2	28.6	27.7	—	—
1998	28.5	28.3	28.4	28.3	28.9	28.4	26.2	26.1	26.3	26.1	26.7	26.2	—	—
1999	27.4	27.5	27.5	27.2	27.4	27.4	26.6	26.6	27.4	26.8	27.1	26.9	—	—
2000	28.1	27.7	27.9	27.3	28.1	27.8	25.9	25.6	25.5	25.4	24.9	25.4	—	—
2001	27.1	26.7	27.3	26.8	27.0	26.9	26.6	26.7	27.1	26.4	26.6	26.6	—	—
2002	30.2	29.5	29.0	29.7	30.1	29.7	26.4	26.3	26.8	26.4	26.6	26.5	—	—
2003	28.7	28.4	28.1	28.1	28.6	28.3	24.8	24.6	24.7	24.8	24.4	24.6	—	—
2004	28.8	28.7	28.8	28.9	29.4	28.9	27.6	27.6	28.7	27.0	27.2	27.6	—	—
2005	27.2	26.9	29.0	27.4	27.5	27.6	27.8	27.5	27.7	27.2	27.5	27.5	27.62	28.9
2006	27.09	28.18	29.23	27.30	28.24	28.0	25.2	25.0	25.1	24.5	24.6	24.8	27.87	28.5
2007	27.75	27.37	29.18	28.42	28.75	28.2	27.28	27.16	27.05	26.92	26.99	27.0	27.53	27.7
2008	26.9	27.1	27.4	27.2	27.2	27.1	27.5	27.1	26.9	27.4	27.5	27.2	26.7	26.51
2009	28.6	28.7	28.7	29.3	29.6	28.9	26.8	26.9	26.9	26.5	26.5	26.7	26.04	25.83
2011	24.5	24.9	24.8	25.2	26.9	25.2	25.1	24.9	24.6	24.8	24.3	24.7	27.36	28.72
2012	28.92	28.19	28.48	27.79	28.93	28.4	26.45	25.61	26.4	26.15	25.28	25.9	27.71	28.14
2013	26.49	26.82	29.85	28.41	28.4	27.9	23.92	25.27	26.77	24.24	25.25	25.0	24.9	25.82
2014	24.67	24.79	25.37	24.58	25.00	24.8	25.72	25.48	26.20	25.31	25.71	25.6	—	27.57
2015	27.48	26.62	27.17	24.7	27.14	26.6	25.27	25.07	26.17	25.04	24.81	25.2	25.69	26.03
	1981～2015、8月平均値					27.70	1981～2015、9月平均値					26.20	2005～2015、平均値	
													26.8	27.3

熊本県水産研究センター提供データ

各月の平均値は、熊本県水産研究センター提供データをもとに、定点35.36.37.39.40の平均値を算出

熊本県水産研究センター提供
自動海況観測HPより引用※AMS(American Meteorology Society) <https://global.scripps.amsoc.org/>

◎研究者による不知火発現の条件◎

では、一般論としてこれまでの八代海における不知火の発現を可能とするにはどのような

条件を必要としているのであろうか。

A. 観測対象まで一定の距離があること。

B. 昼と夜の温度差が大きいこと。

①表面海水温と気温の温度差が大きいこと
(浮島現象)。

表11 不知火発現時間帯の各観測所の風速と風向・各地点の風向集計数

年	松島		三角		八代	
	風速(m/s)	風向	風速(m/s)	風向	風速(m/s)	風向
1981	1.0	南	1.0	北北西	0.0	静穏
1982※	1.0	南	0.0	静穏	0.0	静穏
1983※	0.0	静穏	1.0	西南西	1.0	東
1984※	0.0	静穏	1.0	南西	0.0	静穏
1985※	0.0	静穏	0.0	静穏	1.0	南西
1986※	2.0	南南西	0.0	静穏	0.0	静穏
1987※	0.0	静穏	0.0	静穏	0.0	静穏
1988※	1.0	南南東	0.0	静穏	0.0	静穏
1989	1.0	南南西	0.0	静穏	2.0	南
1992	1.0	南南西	0.0	静穏	1.0	南東
1994	1.0	南南東	1.0	南南西	2.0	南南東
1995	1.0	南南東	0.0	静穏	0.0	欠測
1996	1.0	南東	1.0	北	0.0	静穏
1997	0.0	静穏	0.0	静穏	0.0	静穏
1998	1.0	南南西	0.0	静穏	0.0	静穏
1999	1.0	南南西	0.0	静穏	0.0	静穏
2000	4.0	北東	2.0	北北東	0.0	静穏
2001※	1.0	西北西	1.0	西	0.0	静穏
2002	1.0	北	2.0	北西	0.0	静穏
2003	3.0	南	2.0	南	3.0	南南東
2004※	0.0	静穏	1.0	北東	0.0	静穏
2005	1.0	南西	2.0	北東	0.0	静穏
2006	1.0	西北西	2.0	北西	0.0	静穏
2007	1.0	南西	1.0	東	0.0	静穏
2008	2.0	北	2.1	北北東	0.8	西北西
2009	3.5	北北東	3.1	北北東	0.3	東北東
2011	1.7	南南西	0.5	北北西	0.8	北東
2012	0.5	南西	1.5	東北東	0.4	南
2013	1.7	北東	2.3	北東	0.0	静穏
2014	0.8	南西	0.6	北北西	0.1	静穏
2015	1.3	西	1.1	北北西	0.3	南南西

各地点の風向集計数

風向			
方位	松島	三角	八代
北	2	1	0
北北東	1	3	0
北東	2	3	1
東北東	0	1	1
東	0	1	1
南東	1	0	1
南南東	3	0	2
南	3	1	2
南南西	6	1	1
南西	4	1	1
西南西	0	1	0
西	1	1	0
西北西	2	0	1
北西	0	2	0
北北西	0	4	0
静穏	6	11	19
欠測	0	0	1

不知火発現時間帯の各観測所の風速と風向をもとに集計

- ②気温と地面との温度差が大きいこと(逃げ水現象)。
- C. 観測点の高さが高いこと(海拔10～15m)。
- D. 観測点の高さが低いこと(浮島現象・逃げ水現象)。
- E. 悪天候(雨や強風)ではないこと。
- F. 漁火や対岸の街灯りなどの光源があること。
- G. 永尾の観測地点から大島方向に向かって微風が吹いていること。

H. 潮に干満差があること。
などがあげられている。

そこで不知火の発現条件の検証を目的として、多様な公的データを参考に過去の不知火発現年度と時刻帯における八代海沿岸の八代・松島・三角のアメダス情報やその他のデータ(海水温・潮位変化)に基づく一覧表を作成した。

以下はその概要である。

☆表9の概要 不知火発現時の外気温と日中の最高外気温、及びその温度差。

【気温差 最低3.1℃、最高10.3℃、平均値7.4℃】

☆表10の概要 不知火発現時の外気温と海水面の温度、及びその温度差

八代海北部・中部(定点35～40) (1981年～2004年)八朔当日の計測がなく

月一回実施される内湾調査データを活用(1981年～2004年)

【温度差 最低1.3℃、最高7.4℃、平均値4.6℃】

八代海中部 田浦局 八朔不知火発現時間のデータ(2005年～2015年)

【温度差 最低2.9℃、最高7.5℃、平均値3.9℃】

☆表11の概要 不知火発現時の風速と風向。

【松島： 静穏/6、南南西/6、南西/4、南・南南東/2他】

【三角： 静穏/11、北北西/4、北東・北北東/2他】

【八代： 静穏/19、南・南南東/2他】

※静穏：風力0(風速0.3m/s未満)は風向を示さない

※やや強い風：風速平均10以上～15未満m/s

※強い風：風速平均10以上～20未満m/s

☆表12の概要 八代海の八代と三角の満潮時刻と干潮時刻、及び八代と三角との満潮と干潮の潮位。

【満潮時の潮位差約2.3m、干潮時の潮位差約2.1m】

では、作成した一覧表やC B A I、及び本誌の観測データに基づき発現条件のA～Hを検証する。

A. [不知火は八代海に広く分布し、発現距離は一定ではない]

B. [表9と10が示唆するように温度差は概して大きくはない]

C. [不知火の視認を可能とする観測地点の高度は、不知火までの距離と相関し、一般的に不知火の発現高度が低く、遠距離であれば一定の高度が必要となる]

D. [Cに同じ]

E. [1981年は発現間際まで台風の接近により降雨であったが発現した。一般的には好天が望ましい]

F. [光源の有無に関わらず発現する]

G. [発現中の時間帯は比較的に静穏(0.3m/s)が多く、風向も一定ではない]

H. [潮の干潮はほぼ3時頃で、発現時刻帯の0

時頃から消滅の5時半頃とはラップするがその時刻帯にも視認され干満の影響は受けていない]

以上、研究者が不知火の発現に重要であるとする条件(A～H)であるが、気象データからも明らかなように発現の条件とされる一貫性は認められないのである。

研究者が最も重要視している発現時の外気温と海面の温度差は2.9℃～7.2℃以内であり温度差は大きくなくむしろ小さいと言える。

八代海における潮の干満(表12参照)のサイクルは平均約6時間、干満の最大差は3時頃の平均3m、発現時刻の0時頃と消滅時の5時半頃の最小差は1m～1.5mである。

八代海の主だった平均水深は以下の通りで不知火の発現エリアとのラップは③～⑥である。

① 八代海St-9 (松合漁港) 3.9m

② 同 St-10 3.8m

表12 潮 汐 観 測 資 料 (潮 位 観 測 基 準 表 示)

年	八代						三角					
	満潮			干潮			満潮			干潮		
	日	時刻	潮位(cm)	日	時刻	潮位(cm)	日	時刻	潮位(cm)	日	時刻	潮位(cm)
1981	—	—	—	8/29	—	—	—	—	—	8/29	—	—
1989	—	—	—	8/31	—	—	—	—	—	8/31	—	—
1992	—	—	—	8/28	—	—	—	—	—	8/28	—	—
1994	—	—	—	9/6	—	—	—	—	—	9/6	—	—
1995	—	—	—	8/26	—	—	—	—	—	8/26	—	—
1996	—	—	—	9/13	—	—	—	—	—	9/13	—	—
1997	—	—	—	9/2	—	—	9/1	20:55	610	9/2	3:00	314
1998	—	—	—	9/21	—	—	9/20	20:52	622	9/21	3:01	295
1999	—	—	—	9/10	—	—	9/9	20:58	631	9/10	3:03	306
2000	—	—	—	8/29	—	—	8/28	20:39	630	8/29	2:40	314
2001	—	—	—	9/17	—	—	9/16	20:33	639	9/17	2:39	301
2002	—	—	—	9/7	—	—	9/5	20:48	641	9/7	2:53	312
2003	—	—	—	8/28	—	—	8/27	21:16	629	8/28	3:17	321
2004	—	—	—	9/14	—	—	9/13	20:36	610	9/14	2:41	319
2005	—	—	—	9/4	—	—	9/4	21:08	608	9/4	3:07	319
2006	—	—	—	8/24	—	—	8/23	21:14	608	8/24	3:11	324
2007	—	—	—	9/11	—	—	9/10	20:38	606	9/11	2:41	304
2008	—	—	—	8/31	—	—	8/30	21:02	625	8/31	3:05	300
2009	—	—	—	9/20	—	—	9/19	20:40	644	9/20	2:38	316
2010	—	—	—	9/8	—	—	9/7	20:20	646	9/8	2:30	300
2011	8/28	20:42	410	8/29	2:52	89	8/28	20:40	649	8/29	2:45	304
2012	9/15	20:32	407	9/16	2:48	69	9/15	20:33	628	9/16	2:42	286
2013	9/4	20:27	386	9/5	2:35	96	—	—	—	9/5	—	—
2014	8/24	20:33	378	8/25	2:37	110	—	—	—	8/25	—	—
2015	9/12	20:37	387	9/13	2:46	90	—	—	—	9/13	—	—

出典：気象庁ホームページ
<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/suisan/suisan.php?stn=05>

出典：気象庁ホームページ
<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/genbo/genbo.php>

- ③ 同 St-17 8.8m
- ④ 八代地先 St-6 8.4m
- ⑤ 同 St-7 10.4m
- ⑥ St-35 8.1m

水深を考慮すると干満の差が海水温に大きな影響を与えているとは考えられず、影響を与えるのは日中の外気温である。

また八代海での下位蜃気楼の観測を可能とするには、観測地点の高度や潮の干満差が影響する。

発現年度により多少の発現場所の違いはあるが、明滅・移動といった行動はほぼ変わることとはなく、日本各地で祭りや祝い事が行われる旧暦の「八朔」という特別な期日に因んで発現する。

国立天文台によれば、現在の太陽暦(グレゴリオ暦)と陰暦(太陰太陽暦)には平均1カ月の誤差があり、さらに年によって0.5か月～1.5か月ほどの範囲で変動する。

不知火は常にその陰暦の八朔の未明にフォーカスして発現しており、常識を超越した計算しつくされた行動であると言えるのである。

不知火が蜃気楼である場合、光源の存在が必要条件となる。

その一つを漁火としているが、「不知火の発現する八朔は漁船の出港を見合わせ、街燈も極力消しているの海上に見える光は全て不知火ですよ」と1986年不知火を観測中の地元民が本誌の取材に語った。

発現間際まで雨が降り続いていたにも拘らず、船上からは見えないとされていた不知火の撮影に某メディアは見事成功している。

最早不知火の目視を可能とする常識論は通用しなくなったのである。

過去の特徴的な不知火の動きに規則性はなく、それ自体に動力が備わっているかのような明らかなマシンの様相を呈したObject(物体)な

のである。

これまで論じられてきた「光学現象説・蜃気楼現象説」では到底説明できるものではない。

本誌の双眼鏡を用いた観測では不知火は実験③の側方蜃気楼とは明らかに合致しない。

そもそも下位蜃気楼は、光源となるものが下に反転する。

しかしながら、実際の不知火観測写真では光源は反転せず、二段になった光の上方だけが点滅するケースもあり、下位蜃気楼と不知火は全く別物であると考えなければならない。

★C B A I の不知火観測時の変化状況

- ・上空にU F Oが出現する
- ・U F Oの出現に合わせて不知火の動きが活発化する
- ・磁石が突然45度程狂う
- ・地点間の無線連絡通信が途絶える。

など、不知火とU F Oとの密接な関係やU F Oに関連する電磁場の影響が報告されている。

★本誌の不知火観測時(1986)の変化状況

- ・八代海上空に出現降下したU F Oを観測者十数名が目撃。
- ・不知火にライトで合図を送ると強烈なビーム状の照射を受けた。
- ・早朝、3個の逆三角形を成す不知火が別れを告げるかのように明滅を繰り返した。

不知火とU F Oとは不可分の関係にあると同時に不知火はインテリジェンスを持ち合わせた物体であることを強く認識させられたのである。

九州一帯には「イナウ＝削り掛け・削り花」に代表されたアイヌの風習が色濃く残り、アイヌ語の地名も多々残っている。

さらにアイヌは縄文人のDNAを最も多く受

け継ぐ集団でもあるという。

不知火(シラヌイ)をアイヌ語辞典〔アイヌ語〕対〔日本語〕で調べると次のようになる。

- ・シ(s h i) 大・大きな
- ・ラ(r a) 降る ・ラン(r a n) 降る・下る
- ・ヌイ(n u i) 火炎

アイヌ語では、S I Tカメラが捉えた火炎としてのシラヌイをストレートに表現したばかりか、ズバリ「宇宙から降下する火」を意味しているから驚きである。

何れにしてもU F O L O G Y的考察からシラヌイの蜃気楼現象説は否定された。

残るは、シラヌイの特異な行動とU F Oとの行動の相関性が示唆する“宇宙からの献灯”としての特殊U F Oであるとの答えが導き出されるのである。

★不知火に淵源する『火の国』の古記録

「先代旧事本紀」に収められる「国造本紀」によると第10代崇神天皇の時代まで遡る。肥後国風土記や日本書紀には、崇神天皇の配下が原住民族土蜘蛛を討伐した際、白髭山の空から火が出て自ら燃えあがり、徐々に下って白髭山に落ちて消えたという記録が残る。

“火の国”の呼称はその情景に因んで名付け

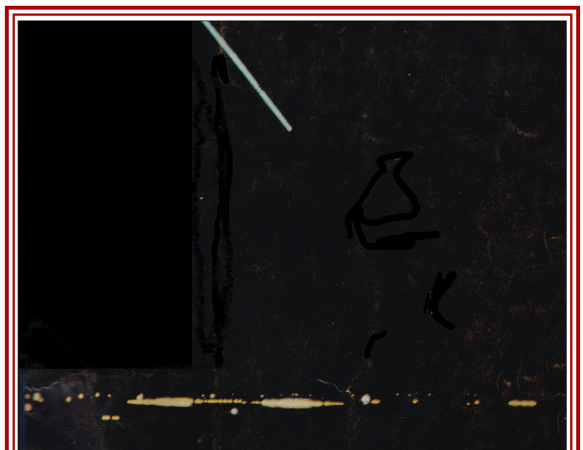


図209 不知火上を飛ぶU F O
千束蔵々島の天神山山頂より大島方面撮影
1963年9月18日午前2:08~2:39
CBAI(1963) THE FLYING SAUCER NEWS Vol.6 No.9

「肥前国風土記」

肥前國者、本與肥後國合為一國。昔者、磯城瑞籬宮御宇御間城天皇崇神之世、肥後國益城郡朝來名峰、有土蜘蛛打猴・頸猴二人、帥徒眾一百八十餘人、拒捍皇命、不肯降服。

朝廷、敕遣肥君等祖健緒組伐之。於茲、健緒組奉敕、悉誅滅之。兼巡國裏、觀察消息、到於八代郡白髮山、日晚止宿。其夜、虛空有火、自然而燎、稍稍降下、就此山燎之時、健緒組見而驚恠、參上朝廷、奏言：「臣、辱被聖命、遠誅西戎、不霑刀刃、梟鏡自滅。自非威靈、何得然之！」更舉燎火之狀、奏聞。天皇敕曰：「所奏之事、未曾所聞。火下之國、可謂火國。」

即、舉健緒組之勳、賜姓名曰火君健緒組、便遣治此國。因曰火國。後分兩國、而為前後。

又、繼向日代宮御宇大足彥天皇景行、誅球磨贈於而巡狩筑紫國之時、從葦北火流浦發船、幸於火國。度海之間、日沒夜冥、不知所著。忽有火光、遙視行前。

天皇景行、敕棹人曰：「直指火處。」應敕而往、果得著崖。天皇下詔曰：「火燎之處、此號何界？所燎之火、亦為何火？」土人奏言：「此是、火國八代郡火邑也。但不知火主。」于時、天皇景行詔群臣曰：「今此燎火、非是人火。所以號火國、知其爾由。」

〈現代語訳〉

肥前の国は、もともとは、肥後の国と合わせて一つの国であった。昔、磯城の瑞籬の宮で天下をお治めになった御間城の天皇(崇神天皇)のみ世に、肥後の国益城の郡朝來名の峯に土蜘蛛打猴・頸猴の二人がいた。配下の者八十人あまり率いて天皇の命令をこばみ、降服することを承知しなかった。朝廷は、勅を出して肥君らの祖先である健緒組を遣わして征伐なさった。そこで、健緒組は勅を承って完全に滅ぼし、ついでに国内を巡って様子を視察した。八代の郡白髮山に着いて、日が暮れて宿った。その夜、大空に火があり、それは自然に燃え、だんだんと下りてきて、この山に届いて燃えた。健緒組はみて驚き不思議に思った。朝廷に参上して、報告を申しあげたことには、「わたくしは、恐れ多くも天皇のご命令をいただいて、遠く西方の蛮族を征伐したところ、刀を血で濡らすこともなく逆賊は自然に滅びました。天皇のご威力によるものでなければ、どうしてこんなことができましょうか」と申した。また、燃える火のありさまをすべて申し上げた。天皇がおっしゃった。ことには、「いまおまえが申したことは、昔から一度も聞いたことがない。天から火が下った国なので火の国というべきだろう」とおっしゃった。健緒組の功績をとりあげて、姓名を賜って火君健緒組

といった。そこでこの国を治めさせなさった。これによって火の国というのである。後に、二つの国に分けて肥前と肥後とした。

また、繼向の日代の宮で天下をお治めになった大足彥の天皇(景行天皇)が、球磨贈於を征伐して、筑紫の国を巡視なさった時に、葦北の火の流れの浦から船出して、火の国にお行きになった。海をお渡りになる間に、日が没して夜は暗く、船を着ける場所がわからなかった。突然火の光が現れ、はるか行く手の前方に見えた。天皇が、船頭におっしゃったことには、「まっすぐ火のところを目指せ」とおっしゃった。お言葉のとおりに行ったところ、とうとう岸に着くことができた。天皇はお言葉を下されて、「火の燃える所は、これは何という地か。燃える火は、またどういうわけの火か」とおっしゃった。土地の者がお答えしたことには、「これこそ正に、火の国八代の郡の火の邑でございます。ただ火の主が誰であるか存じません」と言った。その時に、天皇は、従者たちにおっしゃったことには、「今この燃えている火は、まこと、人の火ではない(神の火であろう)。この国を火の国と名づけた由来、そのわけを知ったぞ」とおっしゃった。

宇治谷(1988)

られたといわれているが・・・。

また、第12代景行天皇の九州巡幸が記された日本書紀には、景行天皇一行が夜間八代海上にて方向を見失ったが、遠方に灯る火によって陸地に到着、「誰が火を灯してくれたのか」と尋ねたものの、誰も知らぬ火(不知火)であったという逸話が記されている。

火の国の命名について、「肥前風土記」・「肥後風土記逸文」では命名者が天皇である

かのように改竄されているとの指摘(井上1971)がなされている。

不知火は別名龍燈とも呼ばれているが、全国的にも龍燈と呼ばれるものの伝説が残っている。

・広島県の厳島神社には『龍燈杉伝説』があり、旧暦の元旦から1月6日頃まで、静かな夜に社前の海上に現れ、最初に1個現れた火

【全国の龍燈伝説】

【 全 国 各 地 で 実 施 さ れ る 八 朔 の 祭 典 旧 暦 8 月 1 日 】

- ・矢島八朔まつり(秋田県・由利本荘市・矢島町)
- ・八朔祭(熊本県・矢部町)
- ・八朔祭(熊本県・山都町)
- ・ふるさと時代祭り八朔祭(山梨県都留市)
- ・上淀の八朔綱引き(鳥取県・米子市淀江町)
- ・八朔祭(福井県・美浜町新庄)
- ・たのもさん(広島県・廿日市宮島町)
- ・大石不動院 八朔まつり(三重県・松坂市大石町)
- ・大洗八朔祭(茨城県・大洗町)
- ・湊八朔祭り(茨城県・那珂湊市)
- ・つばた町民八朔まつり(石川県・津幡町)
- ・仁尾八朔人形まつり(香川県・三豊市)
- ・蜂子神社祭 八朔祭(山形県・鶴岡市羽黒町)
- ・松尾大社 八朔祭(京都府・京都市西京区嵐山)
- ・日積八朔大踊り(山口県・柳井市)
- ・因島はっさく祭り(広島県尾道市因島)
- ・八朔祭り(島根県・益田市高津町)
- ・開口神社八朔祭(大阪府・堺市)

が次第に数を増して50個ほどになり、それらが集まってまた1個に戻り、明け方に消え去るという。

- ・寛保年間に著された『諸国里人談』には、周防国(山口県)上庄熊野権現では、大晦日に龍燈が現れるとある。

- ・丹後国の天橋立の文殊堂には「龍灯の松」があって、毎月16日の夜中に沖から龍燈が飛来してその松に神火を灯すとある。

その多くに共通しているのが、特定の日に海上に現れる火ということである。

不知火も八朔(旧暦の8月1日)に現れることから、この8月1日ということにも意味があると考えられる。

【八朔】

朔とは月と太陽が同じ方向になること、つまり新月と同義で始まり(スタート)を意味する。

その中でも八朔は重要な節日で、いくつかの意味がある。

- ・八朔節供、田実(たのみ)の節供などといわれ、稲の収穫を目前にしての豊作祈願や予祝に関したこと、および各種の贈答(贈物)が行われる。また、稲の初穂を神に献じる穂掛けの儀礼をする所が全国に点々とある。
- ・農作物につく害虫を駆除・駆逐し、その年の豊作を祈願する虫送り(虫追い)が行われる。

- ・馬供節(うまぜっく)と称したりして、馬や人その他鶴亀などの形のしんこ細工(上新粉を水でこねて蒸した生地をついて、着色して、指やハサミを使って細工したもの)を作り近隣知親に贈る風習も多い。初児の祝い事として宅内に飾り立てる。

次章では、「装飾古墳に囲まれた『不知火現象』と『鏡』の考察 II」として、シラヌイが発現する八代海を取り囲むように分布する装飾古墳に限定された特殊文様である沈線(垂下)と専門家が論ずる鏡との関係について考察する。



図210 不知火上空に滞空するUFO！
不知火とUFOを同時に収めた写真
戸馳一大島間の水域上空
1963年9月18日午前1：48～2：30
CBAI(1963)THE FLYING SAUCER NEWS Vol. 6